

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別換承認雑誌第六二七号  
平成三十年二月一日発行「第百二十一卷第二号」

# ホトトギス

二月号



## 風雅の小筥 二二

廣 太 郎

今回は俳句会について。ホトトギス誌友殆どの方が定期的な句会に参加されておられるであろう。「○○会」という名前のついた二十人前後の句会はメンバーが大体決まっていて、その他ホトトギス社句会や芦庵ホトトギス会等の、基本的に何方でも予約もいらず出席出来る百人前後の大規模な句会、はたまた地方の大会等宿泊を伴った会に至るまで、句会の種類は数多あるが、流れとしては、先ず吟行、又は兼題で詠み、決められた句数を締切時間までに投句し、大規模な句会では清記係、小規模では各自が清記をして、いよいよ選句に入る、そして選が終り、披講、名告、選者が居る時にはその選者の選の披構が最後になり、そして選者の講評でその句会は終了する、というのが少なくともホトトギス系では一般的であろう。

さて、皆様はこの一速の流れで何処に重きを置いておられるだろうか。やはり自分の作品、そしてその作品がどれだけ選に入るか、特に選者の居る会であれば、その特選に入れば言う事なしであろう。しかし、敢えて申し上げると、句会の中では前述の一連の流れ全てが同じように大切であると断言出来る。例えば短冊に自分の句を書く時や、各自で清記する時の文字の間違いはないか。勿論選句でも文字の間違いは、披講の時間違って読まれてしまうだろう。最近思うことであるが、選に入った時の名告の声が小さい人が多くなってきたのではないだろうか。確かに人それぞれどうしても声の通らない人は居るだろう。ただ、名告は選者に対する感謝の気持である。せめて上を向いて発声しては如何だろうか。

# 句日記 汀子

平成二十九年二月四日 芦屋ホトギス会

山焼の所在を告ぐる煙かな  
集ふこと二月礼者の心あり

二月五日 下萌句会

立春に心ほどきし朝の雨  
紅梅も白梅も咲きすすむ庭  
薄氷に光の失せし水面あり  
盆梅を地に下ろしたる月日あり

二月六日 ロイヤル俳壇

梅二月庭に刻々ありにけり  
春寒といひつつ今日も出掛け来し  
忘れゆく日々追ひかける日々二月  
病む人も癒えたる人も春隣  
逃げてゆく日々追ひかけて春隣

二月九日 清交社

春時雨今日も出掛ける用意して  
少し足伸ばせば梅見出来さうに  
春の雪帰路の心配ありそめし  
わが庭の梅の仔細を語らばや  
猫柳水音近く引寄せて  
春の雪空の重たくなつて来し  
欠席の報せとなりぬ春の雪  
二月十日 工業倶楽部  
幾度も会ひしが二月礼者として

余寒には油断心のありしこと  
この辺に珍しき雪すぐ解けし  
二月十四日 大阪倶楽部

とどのはぬ気温とて梅盛りかな  
春寒の予報次々日本海  
女にも配られしバレンタインチョコ  
春寒に加はる予定ありしこと  
春寒に放り出されし都会かな  
大股に歩き春寒退ける

二月十四日 綿業倶楽部

贈りたき心よバレンタインの日  
風荒き一日過ぎゆく春隣  
明るさを贈るバレンタインの日  
二月十五日 夏潮句会

雛飾りやうやく客間ととのへり  
雛飾りたるより迎ふ客のあり  
水音の届かぬ二階雛の間  
筆選び書きしことなど春めく日  
兼題は又もやバレンタインの日  
春浅し白寿の友の訃の報せ  
先づ雪の仔細を問うて迎へけり  
二月二十一日 有恒俳句会

薄氷の消えて青空降りてくる  
訪ねくる人待つ時間クロッカス  
風二月雲の流るる早さかな  
結局は帰路に及びぬ春の雨  
着るものに迷ふ二月の外出かな  
フランスの春の便りをもたらせし

二月二十一日 無名会

人事と思へど雪崩怖ろしく  
白といふ色にひそめてぬし雪崩  
体験の話の中の雪崩とて  
鶯のまだとどのはぬ声と聞く  
鶯や姑と住みたる日々を恋ふ  
雪崩てふ雪の怖さを聞くばかり  
鶯に迎へられたる吉野山  
二月二十三日 きざらぎ句会

着陸の遅るる報せ春嵐  
雨に発ち春の嵐に着陸す  
二月二十三日 アネモネ句会

春浅し時間の流れ追越せず  
下萌の野をよぎるとき道となる  
春浅し体調崩したる人も  
春嵐ぐらり着陸態制に  
下萌の昨日を遠くしたるかな  
二月二十四日 時雨句会

逃げてゆく二月捉へて旅用意  
春寒を逃るる家路なりしこと  
春寒の加はるる齟齬となりしこと  
滞在は三日の着替へ春寒し  
残雪の地を発ちて来し友迎ふ  
夜の会の二月装ふ心あり  
考への二転三転春寒し  
二月二十七日 淡路島吟行  
菜の花の色を引寄せて  
淡路島吟行春の浅くとも

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十九年二月二日 蕉心会

日脚伸ぶ風の狼籍ありながら  
冬帝の乱心都心狼狽す  
太陽でさへ冬帝の子分かな  
蕉像の嘸しさうな鼻の穴  
大川の流れは北風に逆らはず  
早梅の青ざめてゐる白さかな  
万両の一粒に風寄り道す  
人類を葬るごとく北風荒ぶ  
二月三日 カトリック新聞選者吟

公園を知り尽し猫日向ぼこ  
二月四日 芦屋ホトトギス会

芦屋駅 二月礼者となる一步  
婚約者連れ来し吾娘や寒明くる  
借景の富士を浮き立たせし山火  
二月五日 野分会芦屋例会  
大祭司めく所作狐の祭かな  
その中に侍者めく獺の祭かな  
金縷梅に風の結び目解けゆく  
二月五日 青嵐会芦屋例会  
猫柳右折虚子館近付けて

海苔搔や阿吽の呼吸爺と婆  
海苔搔くや東京湾を持ち上げて  
猫柳絡め八十路のドライバー  
二月九日 土筆会

日輪を少し歪めて若布干す  
木の実植う日の本の明日信じつつ  
紅梅の幹の色確かめもして  
摩天楼春一番が磨き上げ  
二月十三日 朝日カルチャー若草句会

育てもす蒺藜草を嫌ひな子  
薄氷を押しして大地を覚ましゆく  
薄氷を踏んで地軸をずらしけり  
薄氷に午前中でふ天寿かな  
寒明や列島白く彩られ  
二月十六日 悼句友愛六急逝

逆縁を告げる言の葉冴返る  
二月十六日 北國文芸選者吟  
短調の長調となり雪解風  
二月十六日 登高会

海苔搔いて地球の叫び聞いてをり  
野火走る蠢くものを黙らせて  
有明の夜明け海苔舟揺蕩へる  
二月十八日 六甲会  
九年といふ生涯に冴返る  
去り行ける魂の重みや冴返る

茫と富士凜と伊吹や冴返る  
昼食はおにぎり一つ冴返る  
路の臺揚げて大地の歌を聴く  
二月二十二日 目黒学園句会

片栗の花紫に暮れ初むる  
片栗の花謙遜といふ向きに  
大琵琶の静寂彩る春時雨  
比良比叡裾を広げて春時雨  
二月二十六日 青嵐会東京例会

日溜りに猫日表に梅香る  
マラソンに昂る朝の余寒かな  
白梅に園の空気の和らげる  
白梅に園の輪郭整ひし  
二月二十六日 戦無き日本

佐保姫に見られたいから金縷梅黄  
金縷梅に色無き園の目覚めかな  
獺祭 日本人は祭好き  
二月二十八日 若水句会

段葛色付き初めて実朝忌  
実朝忌虚子朗々と謡ひし日  
アンジェラス揺すぶつてゐる猫柳  
薄氷に押し返さるる犬の鼻  
薄氷を風凸凹に仕上げゆく  
猫柳記念館へは約千歩

# 雑詠 廣太郎 選

初月や夜々太白に見守られ 宝塚 大石 勲  
 マーラーの復活聴いでゐる夜食 同  
 生身魂花鳥諷詠死せるまで 同  
 能面の月光宿す白さかな 神戸 和田華凜  
 パリに酌む新酒は灘の生一本 同  
 夕風を真緒の芒生けて待つ 同  
 一二片欠けて松虫草らしく 渋川 木暮陶句郎  
 榛名湖のひかりに育つ芒原 同  
 みづうみの風も葉擦れの音も秋 同  
 蛇穴に入りて頭上の騒がしき 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 蛇穴に入りて深まる空の青 同  
 秋天にてのひらほどの遠筑波 同  
 くきと音して向き替へし鬼やんま 神戸 千原叡子  
 葉に力戻る夕べや酔芙蓉 同  
 被災地を太古に還し真葛原 同  
 道をしへ道ををしへるつもりなく 福山 竹下陶子  
 道をへし従ひゆけば天守閣 同  
 父の業継げざる墓を洗ひけり 同

蟋蟀のひげの弄る闇夜かな 神戸 山田佳乃  
 茶立虫幽かな雨の気配かな 同  
 潮風の届く酒蔵蔦紅葉 同  
 秋日和膝より低き虚子の句碑 同 藤井啓子  
 怪談の始まりさうな曼珠沙華 同  
 風の色束ね千草の色となる 同  
 ゐのこづち銀座線まで乗り込める 東京 田丸千種  
 男子寮裏に近道ゐのこづち 同  
 何某の妾宅といふ郁子の垣 同  
 垂訓のこゑ炎天の奥よりす 熊本 岩岡中正  
 かなかなや一揆に消えし村ひとつ 同  
 われら健康に子規忌につどひけり 同  
 色深く宇宙引きよせ天高し 東京 橋本くに彦  
 音に音かさねし音や木の実降る 同  
 行秋を海へ押し出す隅田川 同  
 断りし傘追うてくる秋時雨 香川 湯川 雅  
 ばつた跳ぶ音の引張る行方かな 同  
 入り乱れゐる秋声や陰日向 同  
 透き通る雨月の傘にネオンの灯 東京 大久保白村  
 太陽をまだまだ欲しき生姜かな 同  
 新酒でも古酒でもよいがあと一本 同  
 カーテンを閉ざしてよりの月のこと 同 今井千鶴子  
 月の夜の港出でゆく船の水尾 同  
 秋晴と玻璃一枚をへだてたる 同

# 雑詠句評（二月号より）

眞理子・むつみ・敦子  
静龍・葉・保佳  
肖子・とほ歩・中正  
恵明・廣太郎

## 息止めて止めて手火花落ちにけり 東京 岩村恵子

手火花の最後に取り出される線香火花が自ずと連想される。子供の頃、「松になあれ、柳になあれ」と、唱えたものであるが、赤く大きな火をあつげなく落してしまうこともあれば、じりじりと音を立てながら形を変え、長持ちする一本もあり、はらはらどきどきしながら、その火を一心に見つめたものである。臨場感あふれる一瞬一瞬の描写によって、線香火花の持つどこか懐かしく、しみじみとした感慨が伝わってくる。（眞理子）

例えば線香火花の醍醐味は、火をつけてばちばちと綺麗な火花を輝かせ、だんだん軸の先が赤く丸まってくると、それが途中で

落ちないように緊張しながらじつと手に持つて眺めている。最後まで燃え切ると達成感があるが、燃えながら落ちてしまう確率が高いだろう、そんな緊張感が伝わってくる。（廣太郎）

## 青がちに咲く野辺灯し女郎花 伊丹 山口澄子

春の華やかな百花繚乱とは違い、秋には心静まる野の情緒を醸す千草、八千草に心が動く。その中でどの草花よりも抜きん出て、一番先に風と遊んでいるのは女郎花。まるで遠くから誘っているように見える。芒も吾亦紅も秋の野になくはならぬ草草ではあるが、先駆けて野に誘い入れるのは女郎花の黄色と感じた作者の感性。秋草を写生するのに、「青がち」とわざわざ野の景色を詠んだ句に触れたことはないが、言われてみればそこが春の草花とは違うところだろう。その「青がち」の野に女郎花がまるで「灯し」ているように思った作者。女郎花の際立った特徴が詩情深く描かれている。（むつみ）

秋に広がる花野等を散策すると、やはり松虫草に代表されるような、どちらかというとき青っぽい花が主流のように思える。勿論他にも色とりどりに咲いてはいるが、野に咲く花はそれ程目立つていないだろう。そんな中女郎花の黄色はしっかりと自身を主張しているのである。（廣太郎）

天地有情

日子選

虚子句碑に御礼申して秋涼し  
行くほどに光の海となる芒  
武具飾るより子等に狙はれし太刀  
一輪は天使の涙ポピー咲く  
ただ浮いてゐるにはあらぬ浮巢かな  
見たことはなかり浮巢にある土台  
かなかなをかなしと言ひし妻の忌よ  
星月夜されどさだかに妻の星  
露けさの山塊をわが力とす  
一草のごと台風を怖れけり  
初萩のはやもこぼれし汀かな  
頬杖をついて雨月の机かな  
やや褪せてより秋日傘らしくなる  
長き夜を歌仙巻きたる話など  
ある時は浄土より吹く花野風  
鶺鴒高音落暉に染る壇ノ浦  
回り澄む独楽の命の生れけり  
勝独楽の重心低く回りぬし

長岡 安原 葉  
同 稲畑廣太郎  
同 後藤比奈夫  
神戸 相模原 木村享史  
同 熊本 岩岡中正  
同 神戸 三村純也  
同 東京 今井千鶴子  
同 神戸 和田華凜  
同 福山 竹下陶子  
同

一色に空を染め来る赤とんぼ  
夢に見しとんぼうの空現れにけり  
米寿祝ぎ白寿を目指し新酒酌む  
妻は下戸料理に新酒惜しみなく  
よき風を集めて萩のすがれゆく  
厨の灯消し長き夜の灯をともす  
句敵と語り尽くせぬ夜長かな  
昨日とまた同じ夜長でありにけり  
吾亦紅ばかりとなりし淋しさよ  
高原のことしも雨の花火かな  
澄む水を眺めてをれば考と妣  
標札を読みつつ秋の浜に出て  
遠鳴りのなきまま突と日雷  
空蟬の魂なほ残る様にあり  
月見草空はゆつくり暮れてゆく  
夕暮れは刻々と来て白牡丹  
七草に野の風の色増えてをり  
旬日の楽しみ夜々の月の名に

仙台 赤川誓城  
同 東京 大久保白村  
同 龍ヶ崎 今橋真理子  
同 東京 山田閏子  
同 群馬 中杉隆世  
同 神戸 浜崎素粒子  
同 吹田 大橋 暁  
同 熱海 嶋田 一步  
同 宝塚 水田むつみ  
同